

埼玉150周年記念

かみ きた うら

上北浦遺跡出土「岩版」速報展

～低地帯の縄文時代集落遺跡と岩版～



令和3年11月14日(日)～12月24日(金) 江南文化財センター展示室

令和4年 1月11日(火)～ 2月13日(日) 熊谷図書館郷土資料展示室

令和4年 2月22日(火)～ 3月20日(日) 妻沼展示館常設展示コーナー

1 上北浦遺跡の概要

(1) 遺跡の立地

上北浦遺跡は熊谷市北部の江波地内に所在します。この地域は水田が広がる妻沼低地で、遺跡は利根川支流の福川が作りだした自然堤防の上にあります。現在の利根川までは1.5 kmの近さで、縄文時代から利根川の氾濫の影響を受けていたと考えられます。

発掘調査は、工場の施設建設に先立ち令和3年4月から6月にかけて実施しました。

(2) 発掘調査の成果

発掘調査によって、縄文時代後期後葉から晩期にわたる集落跡の一部が明らかになりました(後期から晩期に移り変わるのは今から約3千年前)。

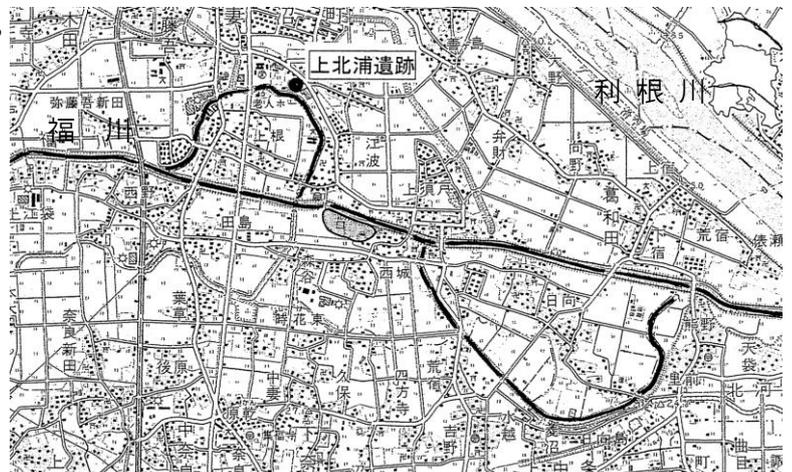
この時代の遺構として^{ちゅうこうどき}竪穴建物跡8軒、^{だせいせきり}土坑6基を検出しました。また遺物は土器(深鉢、浅鉢、注口土器)や石器(打製石斧、磨製石斧、^{せきぞく}石鏃、^{せき}石錘、^{すいすいり}磨石、石皿)が多量に出土しました。

特筆されるのは、^{じゅじゅつぎらい}祈りやまじないなどの呪術儀礼に関わると考えられる遺物の存在で、岩版をはじめとして、後述する^{どくごうし}独鈷石、石棒・石剣、耳飾り、土偶、骨角器などがあります。

(3) 上北浦遺跡の特色

本遺跡の特色は、利根川の氾濫の影響を大きく受ける低地帯に存在する縄文時代の集落跡であることです。

縄文時代後・晩期の遺跡は、埼玉県内では、県南部の大宮台地や、当時は台地だった県東部で多数確認されています。本遺跡のように低地帯の中央部にある遺跡は調査例が少なく、当時の生活環境を考えるうえで貴重な資料になります。



2 全国最大級の岩版

(1) 岩版とは

岩版・土版の研究者は、その性格を論文の中で次のように書いています。「岩版・土版は材質が泥岩ないしは粘土からなる版状の遺物である。破壊した状態で出土することが多く、また赤色塗彩を施したものがあることから、宗教的な遺物の一種と考えられている。縄文時代の晩期に発達し、その分布は大きく見て東北地方と関東地方の二地域を中心とする。(中略)…岩版・土版を護符とする説は、これまでにそういった用途を示すような出土例はないものの、今日最も一般的な見解となっている。」(稲野彰子 1982 「関東地方における岩版・土版の文様」より)

岩版と土版は素材は違うものの、似たような形状で、同様の目的で作られたと考えられていますが、上北浦遺跡では土版は出土していません。

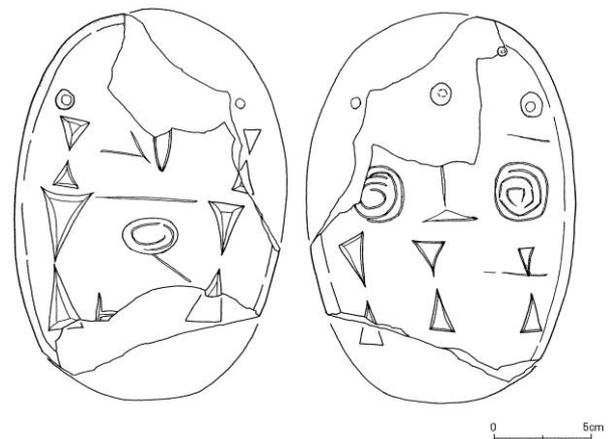
(2) 上北浦遺跡の岩版の特色

本遺跡の岩版は、熊谷市内では上之の諏訪木遺跡で出土している2点に続いて3例目となり、縄文時代晩期のものと考えられます。凝灰質泥岩製で全体の3分の1ほどを欠損していますが、大きさや彫り込まれている文様を復元することができます。

大きさは、長さ 19.2 cm(復元長約 20 cm)、幅 13.8 cm(復元幅約 14 cm)、厚さ 3.2 cmで、これは埼玉県内で出土した岩版の中で最大のものです。

なお、全国最大とされる群馬県伊勢崎市北米岡遺跡(26.2 cm×16.6 cm)、全国最大級とされる栃木県足利市あがた駅南遺跡(20.0 cm×15.0 cm)のものと比較しても最大級の部類に入ります。

文様は、表裏両面を貫通する一対の小さな穴、縦長の二等辺三角形の頂点を向かい合わせたI字文と呼ばれる文様、そして渦巻文などを彫り込んでいますが、これらの要素は他の遺跡で出土した岩版と共通します。



岩版 実測・復元図

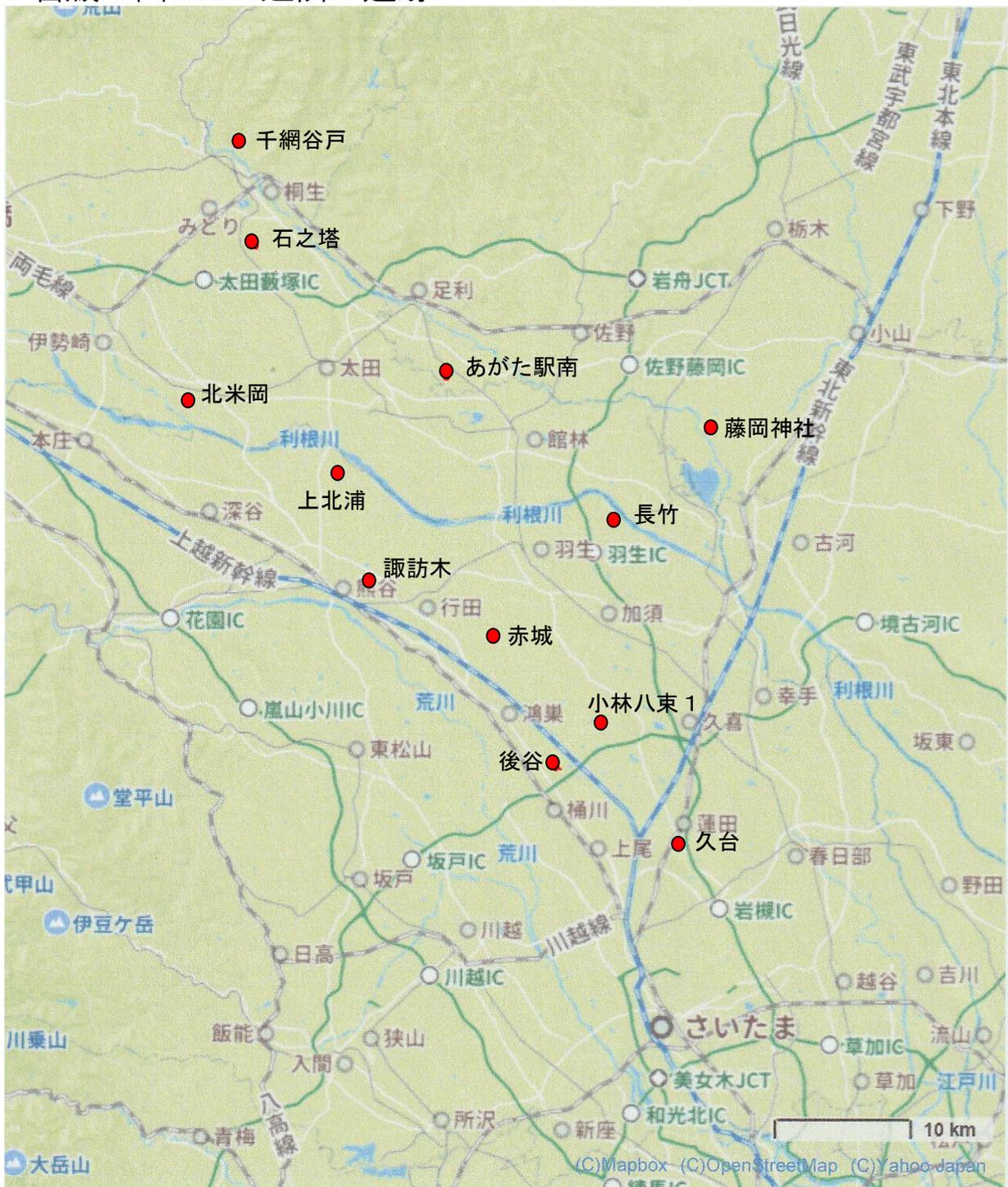
(3) 岩版が出土した遺跡の広がり

本遺跡の周辺地域で、これまでに岩版が出土している遺跡は、前述の3遺跡のほかに群馬県桐生市千網谷戸遺跡、太田市石之塔遺跡、栃木市藤岡神社遺跡、そして埼玉県内では加須市長竹遺跡、久喜市小林八束1遺跡、蓮田市久台遺跡、鴻巣市赤城遺跡、桶川市後谷遺跡などがあります。これらの遺跡は、渡良瀬川や利根川に沿った地域と、縄文時代には館林と鴻巣の間につな

がっていた台地の縁に分布しているようです。縄文時代後・晩期の遺跡が多数存在する埼玉県南部のさいたま市周辺では岩版は見つかっていません。

同様の大きさや文様構成を持つ岩版の分布から、岩版を通じて共通した文化圏があり、上北浦遺跡もその中のひとつであったととらえることができます。

岩版が出土した近隣の遺跡



3 呪術儀礼に関わる遺物

(1) 独鈷石、石棒・石剣

独鈷石は、仏具である「独鈷」の形に似ているのでこの名称で呼ばれていますが、時代が違うので関係はありません。使用方法は不明です。

石棒と石剣は似ており、一方の端部に膨らみをもち、文様を施すものもあります。棒状の部分が扁平で剣の形に似ているものを石剣と呼びますが、刃物として使われたものではないようです。どちらも男性を象徴した遺物と考えられています。



(左から)
独鈷石
石棒
石剣2点

(2) 耳飾り、土偶、骨角器

耳飾りは、耳たぶに開けた穴にはめ込んで使ったと考えられます。使用する粘土や施す文様によって精製のものと粗製のものがありますが、精製品の中には良質な粘土を使い、先端の尖った鋭利な刃物のような工具で文様を刻み込み、赤色の顔料を塗ったものがあります。

土偶の出土数は少なく、右腕部と右脚部と思われる2点のみです。

骨角器は鹿の角を加工したものが1点出土しましたが、装飾品と思われるのですが、使用方法は不明です。



(上段)
耳飾り5点
(下段左から)
耳飾り3点
土偶2点
骨角器